
小さな指輪が呼んだ悲劇

貂寡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな指輪が呼んだ悲劇

【ZPDF】

Z5371D

【作者名】

貂寧

【あらすじ】

私と彼は「よく普通のカップルだった。ある日、彼から誕生日プレゼントと言われて渡されたのは小さな小さな指輪だった。それは、結婚指輪・・・そして私と彼の残酷な恋の話しが始まった。

「はいこれ、誕生日プレゼント。」

「そう言われて、渡されたのは小さな小さな指輪だった。

「これどうしたの？」私は聞く。

「買った。」彼は笑顔を作つていう。

「高くなかった？」私は値段を気にする。

「そんなにしなかったよ。」彼は嘘をつく。

高かつたにきまつてている。収入があまりない彼がこんな指輪を買つはずがない。

「嘘付いてるでしょ。」彼の瞳が揺れ動く。これが彼の嘘をつくときの癖。

「なんで？」

「女の感つて言つ感じ？」

「そう。それ一・三〇万円したんだよね。」

彼がすんなり言つ。

「どうして・・・」そんなプレゼントを私にしたのだらつ。彼は私の動搖に比べて明るすぎる笑顔で言つた。

「結婚しよう。」

「うそ・・・」私は戸惑う。いきなり結婚しようなんて。まだ付き合つて始めて一年もたつていないので。私みたいな女で良いの？

「だから結婚しよう！！それが結婚指輪なんだよ。」

彼は、一生懸命になつて言つ。

今、私の指にはめられている指輪が結婚指輪だなんて。

こんなに必死になつている彼をみるのは、久しぶりだつた。付き合つてくださいと言われた時以来だつた。

そんな彼を見るといつも嬉しくなつてしまつ。

前から良いなと思っていたし・・・それもいいかな。

「はい・・・」今自分の顔を鏡で見ると真っ赤になっているんだろ
うな・・・

そう思いながら必死の思いで返事をする。
このころは、幸せだったんだ。

まだ本当の彼を知らないこのころは・・・

彼の周りで変な事が起こりだしたのは入籍して1ヶ月くらい後のこ
とだった。

まだ、どこに住んでどうやって生活するかとかそんな具体的な事は
話し合っていなかった。

だけど、幸せだった。

彼と私は私が住んでいたアパートに住み始めた。

そんなある日、私が夜遅く仕事から帰つてくると、
いつもソファーに座つて待つているはずの彼がいなかつた。
どこに行つたのだろうと、ご飯を口に運びながら静かな室内に耳を
ます。

【ガチャツ】

彼を待つていると玄関が開く音がする。

「お帰りーー」と私は玄関の方へと走つていく。

しかし、そこには誰もいなくてドアだけが開いていた。
ドアから顔を出して辺りを見回すが誰もいない。
静かにドアを閉める。

彼はどこに行つたのだろう・・・

私は、不安に思つて洗つていた食器を片付けに行く。
すると、今さつきまで誰もいなかつたはずのソファーで彼が寝てい
た。

何時戻ってきたのだらう。私は、不思議に思いながらも食器を片付ける。

それからというもの、私と彼の周りでは不思議なことが起こり続けていた。

彼の衣装ケースから、洋服がどんどんなくなつていった。

捨てたはずがないのに減つっていく。

彼にそのことを聞いたが、返答はない・・

他にも、水道が流しつばなしだつたり。

テレビが付けっぱなしになったり。

なんだか色々あつた。

私と彼の間にも大きな溝があいてしまつたようだつた。

そんなある日・・・

またまた、残業で夜遅くなつて会社から帰つていたときだつた。ちょうど、コンビニとビルの間にある薄暗い公園の横を通り過ぎているときだ。

どこからか、チェーンソーの音がした。

音のする方は、薄暗い公園の方だ。

そこをのぞいてみると、チェーンソーらしき物を持った男の人人が立つていた。

その男の前には、手首と足首を縛られそして口にテープを巻かれた女性が座らされていた。

何をする気なのだろう。私は、静かに見入る。

男の手に持たれたチェーンソーは、音を立てて回転をしていた。

男は、それを軽々しく女性の体にのめり込ませた。

男の表情は解らなかつたけれど、私にとつてその光景は地獄そのものだつた。

辺りに舞い上がる血液がまるで噴水のように見える。

肉片も散らばり近くにいたカラスがつづいていた。

どんな映画のワンカットよりも残酷なこの風景、それを田にしてしまった私はすぐにここから立ち去りたかった。

早く立ち去ないと、なんだか良くないことが起こりそうだった。

怖かった。チーンソーを持った男が怖かった。

動搖して私は、今立っている所が砂利道だと忘れ、音を立ててしまつた。

もうだめだ。こんな事・・・

早足になつて立ち去るうとする私の田の前にチーンソー男は立ちはだかる。

片手に持つたチーンソーはまだ、何かを切りたそつに回つていた。恐怖で足がびくともしない私は、怖かった。

しかし、チーンソー男は指を一本立ててネックウォーマーで隠している口元にあてる。

静かにするように言つてゐるかのようだ。

私は、悲鳴を上げることもできずに彼をみていた。

チーンソー男は、私が静かにしていることをみて走り去つていつた。

なぜ、私を殺さなかつたのだろう・・・

不安に思いながらアパートへと続く坂道を上る。

チーンソー男は黒いネックウォーマーで口元を隠し、サングラスをかけていた。

だけど、私は気配で解つてしまつた。

あのチーンソーを握つていたのが彼だと。

嫌な予感・・・それは前触れもなくやつてくる。

だけど、もし彼がチーンソー男だったら

不安と恐ろしさ。そんなわけがないといつ、無理な納得。

そして私は、彼にもらつた指輪を触る。

彼がそんなことをするはずがない。そう決心をして玄関のドアを開ける。

「ただいま！」今、夜中の2時を少し回ったところだ。

とても静かなアパートがそこには、あった。

しかし、私にはまた別の音が聞こえてきた。チョーンソーの音。

私は、恐怖に支配された頭を振る。

“そんなはずがない。”自己満足の結果を出す。

「おかえりーユメ・・・

暖かい、彼の笑顔が待っていると思っていた。

しかし、彼の方を向くと手には洗つたばかりのチョーンソーが握られていた。

「ねえ・・・そのチョーンソーは何？」

私の声は怖さで震えている。指には、小さな小さな指輪をはめて拳を作る。

彼は、笑顔でこういった。

「これ、そうだな一人を殺すためのチョーンソー。商売道具つて感じかな？」

彼は、そう言つて高々と上げたチョーンソーの回転する刃を私に振り下ろす。

私は、どこかで見たことのあるような赤い、噴水を目にしていた。

そう、今日の公園で見たあの女性が切られる光景と全く同じだった。

・

翌日、携帯電話で呼び出しを受けた。

場所は、俺が住んでいたアパートだった。

現場に着くと血まみれになつた彼女がいた。指がどこにあるのか解らなかつたがちゃんと指輪がはめられていた。

「警部、ご愁傷様です。」そう言われて俺は、一礼する。

彼女は、良い女性だつた。俺の秘密に気付くまでわ。

気付かなければもつと良い毎日が生まれていたのに・・・

そう思いながら灰色のシートを最近頻発している事件の第10人目の被害者に掛けた・・・

(後書き)

最後まで呼んでいただきありがとうございました。

今回ホラーの短編を初めて書きました。

まだまだ、文章がうまく書けないので何かアドバイスを貰うと幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5371d/>

小さな指輪が呼んだ悲劇

2010年11月23日03時49分発行